



Hot!ほっと

世界をもてなすホストタウン／3 熊本・玉名 アンゴラ (アフリカ) /熊本

毎日新聞 2020年1月5日 地方版



女子ハンドボール世界選手権でアンゴラチームを応援する澤田さん（前列左から2人目）

（2019年8月登録）

日に日に心近づく

「アヴァンチ（進め）！」「ボアボーラ（ナイスゴール）！」。2019年12月5日に熊本市南区であった女子ハンドボール世界選手権大会のアンゴラ―ノルウェー戦。スタンドに駆け付けた熊本県玉名市の市民応援団の中に、流ちょうなポルトガル語でアンゴラの選手らを応援する駐アンゴラ大使、澤田洋典さん（63）の姿があった。

今年の東京五輪・パラリンピックでアンゴラのホストタウンを務める玉名市。縁を取り持ったのが同市出身の澤田さんだった。

2016年から駐アンゴラ大使を務める澤田さんが関係者から「アンゴラの五輪前キャンプを熊本に呼べないか」と持ちかけられたのは17年6月。「古里熊本のためならば」と橋渡しを買って出た。

早速その年の夏、熊本で開催された女子ハンドボールの国際大会「ジャパンカップ」に出るアンゴラチームの壮行会を大使公邸で開くなど、関係構築を始めた。18年6月には玉名に帰郷し蔵原隆浩市長に面会。アンゴラのキャンプを受け入れてくれるよう頼んだ。

玉名市は翌年7月、蔵原市長がアンゴラを訪問するなど関係を深め、女子ハンドチームのキャンプ誘致に成功。アンゴラのホストタウンにも決まった。「相手

国との折衝や通訳など、大使がいなければ誘致交渉さえ不可能だった」。玉名市の担当者は感嘆する。



2019年11月、女子ハンドボール世界選手権に出場するため熊本空港に来日したアンゴラチームを玉名市職員らが出迎えた

「アンゴラ? どの国だ?」。19年夏、ホストタウンに決まった当初はそう言って首をかしげる市民も多かったが、市は同年11月にアンゴラの公用語のポルトガル語やアンゴラ料理の教室を開催。ポルトガル語は代表的なあいさつの「オイッ(やあ)！」から。料理は魚と野菜をココナツミルクで煮込んだ「ムケッカ」やキャッサバ粉とバナナの炒め物を作った。

アフリカ南西部のアンゴラは玉名市から約1万2700キロ。日本からの直行便がないため欧州や中東で乗り継がなければならず、飛行時間だけでも約20時間かかる遠い遠い異国だが、玉名市民との心の距離は日一日と縮まっていった。

女子ハンド世界選手権の市民応援は19年11月30日の初戦と12月5日の第4戦で計230人が駆け付けた。アンゴラの国旗を振り、国歌を歌う市民を澤田さんは「古里の人たちのポルトガル語を聞く日が来るとは」と感無量の面持ちで見つめた。

アンゴラに住む日本人は34人(18年10月)、日本に住むアンゴラ人は35人(同年8月)。互いにまだ遠い国だが、東京五輪・パラリンピック前にキャンプを張る女子ハンドチームには地元小中学生との交流や寺の鐘突き体験などをしてもらうことを考えている。市民も総力でもてなす。「絆は日に日に固まっていく」。澤田さんも引き続き関わる。【城島勇人】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは(株)フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.